妻に叱られて㉗

「生きがい叱られた」で妻に

土居　修

島崎敏樹（1975年没。精神病理学者）は述べている。「生きがいとは居きがい（仲間と一緒に生きること）と行きがい（自分が進んでいくことである）」と。うまいこというねや、と喝采した退職直前の3月中旬。桜前線の北上を切望した深更であった。

下旬、窓のむこうに花吹雪が舞っていた。滅びの美学を視た。井上勝也（2020年没。心理学者）の「生きがいには社会的生きがい（ボランティア活動やサークル活動など）、非社会的生きがい（信仰や自己鍛錬など、直接社会とは関わらない）、反社会的生きがい（誰かや何かを憎んだり、復讐する願望を持ち続けたりする）の三つがある」を知る。見事な見解ぜよと感服していたら、いつしか、新年度になっていた。

自由気ままな24時間が私には約束されていたはずであった。だが、数日後には喉元に匕首を突きつけられたような感覚。おまえに生きがいはあるかよ。思わず、震撼。これといった趣味のない人生を呪うしかなかった。葉桜が眩しかった。

日に日に募ってくる焦燥。遂には妻にまとわりついて過ごすようになっていた。買い物に行くといえば、哀願を繰り返し、鬱陶しがられながらも付いていく日々。「まるで濡れ落ち葉じゃないのよ」と叱られ続けたが、生きている証しはこの他にはなかった。

初夏の昼下がり。妻がパソコンを立ち上げていた。

「産業廃棄物、えっ。それが、どうしたが」

「先を、読んでよ」

マウスを動かしていく。

「定年後の夫のことを『粗大ゴミ』などと言っている人たちがいるが、私はそれよりも『産業廃棄物』と呼びたい」。女子差別撤廃条約批准に伴い、朝日新聞が開催した国際シンポジウムでの上野千鶴子（フェミニスト）のことばが突き刺さってきた。彼女の造語というよりは、1885年以前にも一部で使われていたらしいとも記してあった。

唖然としていたら、

「わたしは『産業廃棄物』と暮らすのは、嫌だからね」

と、妻が叱っていた。

濡れ落ち葉でもなく、粗大ゴミでもない。わたしは、もはや産業廃棄物でしかありえないのか。索漠とした自己批判に苛まれて、戦慄。

しばらくして、

「わたしだって、『産業廃棄物』にはなりたくないね」と辛うじていった。

「じゃあ、お遍路をしようか」

待ち構えていたかのようにことばを継ぐ妻。深い情愛であったか、どうか。定かではないが、今にして巧みな謀略であったと思う。55歳の妻のしたたかさに脱帽するしかなかった。

「それって、生きがいだよね。非社会的だけど」

虚勢を張りながら、どうにかことばを探してきた。わたしの苦渋を知ることもなく、にこやかな表情でうなずく妻。かつての美貌にはいささかの翳りもないが、年齢を重ねるごとに狡知に長けてゆく。恐るべき「熟女」となっていた。思わず、驚愕。由々しき事態であるなと悶絶した。生気を取り戻した瞬間、ある疑問が脳裏をよぎっていった。妻が熟女であるや、否や。検討するしかない。

熟女は「30歳代から、50歳代の、成熟した色気の漂う女性」を指すらしい。妻は55歳。年齢的にはなんら支障はない。一方の定義である「色気」も年代相応に備えていると思う。ただし、「成熟した」という枕詞的条件が世間一般に受容されることはないだろうなと涙ぐんだ記憶。それでも、私の妻はまぎれもなく熟女であった。

その熟女が昨年3月に還暦を迎えている。もう熟女と呼ぶことはできなくなった。悔恨を少なからず残しているが、ひとつの時代の終焉を眺めるのはせつなかった。

淑女という呼び方がある。「10歳代、20歳代、さらには60歳代以上の女性」を指すという。しかしながら、年代だけではない。「しとやかな品位」が必須の条件。妻を眺めてみた。未だに衰えを知らぬ端整な美貌は奇跡といってよい。私を叱りながらも、決して声を荒げたり汚い言葉を使ったりしたことはない。淑女の降臨か、狂喜した。美酒佳肴に溺れた一夜を忘れることはできない。

11月26日、四国霊場を四巡し終えて結願。熟女および淑女に騙され叱られながらの遍路旅であったが、振り返れば、二巡目ぐらいから生きがいとなっていたといってよい。日常空間から非日常空間への離脱、俗空間から聖空間への接近には他をもって代えがたい快感があった。

来年は五巡め、逆打ちをするが、納札は緑色。

「緑色だよ、緑色。みんなに見せびらかしてやるぞ」

「ばかじゃないの」

「どうしてよ」

「それが、あなたの生きがいだったの」

薄っぺらねと淑女が叱っていたが、聞き流す。緑の納札を掲げる私に他の巡拝者は畏敬の念を覚えて立ち尽くすだろう。その光景を想うと、知らず相好が崩れてしまう。他者から嫉妬される存在であること。それこそが、碩学の見識をはるかに凌駕した私のあらたな生きがい。